

| | | |
|---------|-----------------------------|-------|
| 称号及び氏名 | 博士（人間科学） | 石田 暢子 |
| 学位授与の日付 | 平成24年3月31日 | |
| 論文名 | アブジェクションという視点から見た主体の生成と心理療法 | |
| 論文審査委員 | 主査 | 川原 稔久 |
| | 副査 | 総田 純次 |
| | 副査 | 橋本 朋広 |

論文要旨

Julia Kristeva は人が感じる「おぞましさ」とそれに対して起こる棄却の作用をアブジェクションと名付け、「おぞましさ」が主体と客体の未分化な状態に関連し、その原点は人が母子未分化な状態から主体として確立していく過程と深く関わることを説明している。このアブジェクションは、Kristeva が自身の臨床活動の中から汲み取ってきたものであり、人のこころを理解するうえで重要な概念なのではないかと考えられる。しかし、日本にアブジェクション概念を紹介しその用語を用いているのは主に文学や哲学の領域であり、心理臨床領域ではほとんど知られていない。そこで、本論文ではこの Kristeva のアブジェクション概念について臨床心理学的視点から紹介し、それが心理療法の実践にどのように生かしていけるのかということについて論じていきたい。

以上のことを考察するにあたり、本論文は以下のような構成になっている。

序章

第1章 Kristeva のアブジェクション論と主体生成

第2章 アブジェクションの働きに関する一考察

第3章 ロールシャッハ・テストを通してみるアブジェクション

第4章 アブジェクションと心理療法

終章 総合考察

まず第1章では、アブジェクションという概念について紹介した。その際、アブジェクションが主体の原点と関わる概念であることから、主体生成のメカニズムに焦点をあててまとめた。そのメカニズムとは以下のようなものである。母子一体の状態から子どもの主体の萌芽を用意するのは一体となっている<母>に他ならず、<母>が子ども以外に欲望するル・サンボリック（記号象徴）に対して、子どもがそこに<母>以外の性質のものを見るからである。そこに子どもは Kristeva が<想像の父>と名付けるものを想像する。その子どもが抱える事になった<母>と<想像の父>という2つの世界は、別の性

質を持ったものであるがゆえに交わることなく存在し、その2つの世界の境界にはどちらにも属さない空隙、つまり<空虚>な部分が生じる事になる。Kristeva は、この構造が自体愛と対象愛の間にあるナルシズムの状態である考える。そして、このナルシズムの構造が、まだ<主体>でなものとまだ<対象>ではないものとの最初の分離と考えられるとして、Kristeva はこの構造を主体生成の<ゼロ度>と述べた。この構造において主体の芽が表れ始めた子どもは、もと居た<母>の場を始原の融合状態へと引きもどそうと誘惑するおぞましい存在であると感じ始め、次第に<想像の父>へ同一化してゆき、そして<母>の場を棄却するという。そのおぞましさとおぞましさゆえの棄却がアブジェクションなのである。

では、このアブジェクションが現実のわれわれの生活の中で、あるいは心理臨床の実践においてどのように生じるのであろうか。そのことについて第2章以降で考察した。

第2章では、アブジェクションの働きについて現実場面における心的力動の面から考察を試みた。具体的には、グロテスクな絵を描くと言われる松井冬子の絵を取り上げ、なぜ鑑賞者が「気持ち悪いと思いつつも気になる」のかということ考察した。松井の絵の代表的なモチーフである内臓を露わにした女性像を取り上げ、そこに描かれているものを象徴論的に論じた結果、松井の絵を見て鑑賞者側に生じるものはアブジェクトに他ならないと論じた。しかし、鑑賞者は松井の絵が持つ生と死の両義性から、その絵を自分なりにどう見るかという内的作業によって、そのアブジェクトを棄却し、アブジェクトから這い出してくると説明した。つまり松井の絵の両義的な曖昧さゆえに、そこへ自らのストーリーを投影し、意味を与えるという形で棄却したのである。その棄却はアブジェクトなものによって曖昧になった鑑賞者の主体を再構成させることになるので、鑑賞者には内側から自分がまとまるように感じられ、鑑賞者は彼女の絵に惹きつけられているのだとまとめた。これらのことから、松井の絵によって生じたアブジェクトな体験は、鑑賞者の同一性を一時的に揺るがしたが、鑑賞者は自身の持つ象徴機能によってアブジェクトを棄却したのだと考えられた。

第3章においては、アブジェクションによる心的力動をロールシャッハ・テストによって構造面から捉えようと試みた。事例のクライアントの病態は、主体の確立に問題を持った境界水準にあり、また環境や状況に依存しているため、同一カードの同一方向から見えるものは1つであった。クライアントの内面は、カード回転することによって変化するものであり、クライアントにとってこころの動きは体の動きによる状況の変化と同じくして動くものであった。しかし、唯一同一方向において2つの反応が生じた所があった。それは本研究によって見出した、形体水準の低下と Specification の低下というアブジェクトな体験が生じたと考えられる箇所であった。つまり、クライアントはそのアブジェクトをアブジェクションすることによって同一方向に独立した2つの反応を見ることができたのである。この瞬間においてクライアントのこころの動きは体の動きに縛られたものではなく、自らの責任で見方を変え、物事を判断する責任主体がクライアントに生じた。つまり、クライアントはアブジェクションによって主体

確立への足がかりをつかんだのである。

第4章では、筆者の受け持った不登校の女子高校生の事例を提示し、心理療法の実践におけるアブジェクションを論じた。事例のクライアントは、風景構成法などからある程度のこころの構造を備えており、主体を確立する途中にあったと考えられたが、思春期において同性との友人関係につまずいて傷つき、生じた主体が退却した状態であった。クライアントは感情的に包み込まれる体験が乏しい家庭環境にあって、さまざまに生じてくる感情を吐き出すように絵を描き、絵と自分との閉じられた世界に守られている状態であった。そのため、クライアントにとって絵が〈母なるもの〉の機能を果たしていると捉えて、クライアントと絵との関係に注目した。面接が進む中、クライアントは絵の中に描ききれないものにぶつかった。その描ききれないものが絵の中の女の子と赤い糸で結ばれた男性であったことや、同時期の面接で思いだされたのが優しく祖父の存在であったことから、その描ききれないものは〈母なるもの〉の欠如、つまり〈想像の父〉であると考えられた。そして〈想像の父〉が生じてきたのと同じくして、クライアントの中にアブジェクトは生じ、それはグロテスクな絵を何枚も描くという形であらわれた。アブジェクトはクライアントが〈母なるもの〉と〈想像の父〉との間で揺れ動く最中に、つまりナルシズムの構造をたどりなおす最中に生じてきたのである。そしてグロテスクな絵を描くことを通して自分のアブジェクトと向き合いだしたクライアントは、自分の中にある「空虚」感に苦しみ出した。同じ頃、他者にうまく伝わらないこともあるからと絵にタイトルが付けられ、クライアントの中で言語という象徴機能、〈想像の父〉への同一化が進んでいることを感じられた。そして、「空虚」に反応して貧欲な取り入れが生じたとき、ついにクライアントのアブジェクションは頂点に達し、これまでの絵を捨てるという〈母なるもの〉の棄却が起こったのである。クライアントはそこから他者に開かれた新たな絵との関係を築き、新しく描かれた絵によって、クライアントの主体が回復したことが理解された。

終章では、各章で表れたそれぞれのアブジェクションを比較しながら、特に心理臨床の実践に還元するために病態水準を念頭において、アブジェクションがどのような形で表れたのかを考察した。第2章のように日常において精神的に健康な人々に見られるアブジェクションは、確立している同一性を揺るがす時に表れるが、持ち合わせている象徴機能によってそれらは棄却され、そのことによって主体が再確認されることから〈私〉が確かめられる体験となる。精神的に健康な人とは主体の確立したエディプス構造が成立している人でもある。第4章のクライアントはこのエディプス構造を確立する途中と考えられたが、問題を抱えたために主体が退却した状態にあると考えられた。その場合において、アブジェクトは主体を回復させるべくナルシズムの構造をたどり直す過程において表れた。クライアントは生じたアブジェクトと向かい合う中、〈母なるもの〉と〈想像の父〉の間に生じる「空虚」を感じ始めた。そして、それによって対象の貧欲な取り入れが生じた時、同一性を揺るがされる体験となりアブジェクションが生じたと考えられた。一方で、第3章の境界水準にあるクライアントにおいては、主体が確立

されていないため、主体が立ち現れるその時とアブジェクションは深く関わっていた。ロールシャッハの反応において、状況に依存した見方をしていたクライアントは、その状況の中にアブジェクトなものが生じてきた時、自分の判断という視点を働かせ自分の責任を引き受けた反応をした。それはアブジェクトという強い嫌悪感情によって、状況に依存していたクライアントが<私>という主体に気が付いていくプロセスだと言えるだろう。

このようにアブジェクションは、さまざまな病態において表れるが、その表れる形は諸病態において異なる。しかし、いずれの場合においてもそれは主体と関連して働くものであった。心理療法に訪れるクライアントは、それぞれに主体がなんらかの危機に瀕して困難を抱えていると考えられる。そのため心理臨床の実践において主体との関連からアブジェクションという視点を持つことに意義があると考えられた。

学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 石田暢子

学位論文題目 アブジェクションという視点から見た主体の生成と心理療法

本学位論文審査委員会は、1月19日、1月26日、2月2日の3回にわたって学位論文審査委員会を開催し、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

(1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、**Kristeva, J.**がおぞましさを棄却であるとした **abjection** 概念が心理療法に有用であることを臨床心理事例から実証したものであり、研究テーマは **abjection** 概念の臨床心理事例への適用に絞り込まれている。序章では **abjection** 概念に関する先行研究を総覧し、第1章では **abjection** 概念を主体生成として捉えること、第2章では絵画鑑賞における **abjection**、第3章では境界例のロールシャッハ体験における **abjection**、第4章では思春期危機事例における **abjection** を扱っている。

(2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、健常者の内的体験および臨床事例の内的体験に関する事例研究を一貫して行っており、方法論は明確であり研究テーマに有効であると評価できる。第1章では、**Kristeva, J.**が恐怖症および境界例の事例から **abjection** における主体を論じていることに添って主体生成を論じており、第2章では健常者の絵画鑑賞の内的体験、第3章では境界例水準の事例におけるロールシャッハ法の内的体験、第4章では思春期危機事例の心理療法における内的体験、に関して事例研究を行っている。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論文は、その研究テーマである **abjection** 概念と主体生成に関して、以下のように、先行研究の調査を十分に行っていると認められる。序章では **abjection** をめぐる **Kristeva, J.**の試論(『恐怖の権力』1980)が導かれた経緯を、**Kristeva, J.**による自作解説(1980)、枝川(1982、1983、1987)、西川(1999)による先行研究を踏まえ明らかにしている。また、**abjection** に関する本邦の先行研究(枝川 1982:1983:1987、高田・小出 1996、西川 1999、吉村 2000、藤平 2004、岩田 2004、三谷 2006、大熊 2009)を批判的に吟味し、その概念が主に文学の領域で使用されるのみで、臨床心理学領域ではほとんど用いられていないことを明らかにしている。とくに第1章では **abjection** による主体生成の考えを1980年代以降の **Kristeva, J.**の論文(1980、1981、1982)によって検討し、**Freud, S.**のナルシズム論、**Lacan, J.**の象徴機能の観点、および **Klein, M.**の発達理論と対比している。第2章では、「不気味なもの」(**Freud, S.**)「グロテスク」(**Kayser, W.**)、**Leonardo da Vinci**の解剖図に関する **Freud, S.**および **Neumann, E.**の象徴論を踏まえ、**abjection** 概念を検討している。第3章ではロールシャッハ法の構造解析に関して、クローパー法(高橋・北村 1981、小野 1991)、片口法(片口 1987)およびエクスナー法(高橋ら 1998)との対比から辻(1997、1999、2003)による阪大法の先行研究を踏まえている。また境界例事例のロールシャッハ反応に関しては、精神分析学の継起分析(馬場 1983、1995)を踏まえている。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文の研究素材の中心は **abjection** をめぐる臨床心理事例での内的体験に関するデータである。第3章では境界例の事例に関して、ロールシャッハ法に対する反応の詳細を自由段階反応および質疑段階反応として提示した上で、記号化・量的整理を示し、把握型・体験型・反応継起の構造について形式分析および内容分析を緻密に行い、データを十分に吟味している。第4章では、著者が行った思春期危機事例の心理療法経過に添って各面接セッションの詳細な記録が提示され、論証の根拠となる事実を緻密に吟味していることが認められる。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論文の新しい知見は、**abjection** が主体の危機とそこからの回復の重要な契機となっていることを、臨床心理事例から示したことである。**Kristeva, J.**の **abjection** 概念を主体生成の観点から捉え直し、1. 健常者の絵画鑑賞体験、境界例のロールシャッハ体験、思春期危機事例の体験を **abjection** の視点から分析したこと。2. これらに基づいて臨床心理事例に対して、**abjection** から見た主体生成という新しい分析視点を打ち出したこと。これらは先行研究にはない全く新しい知見であると認められる。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

これら新しい知見に関しては、先行研究の詳細な調査と病態水準に応じた各事例の詳細なデータを根拠に説得力がある議論が展開されており、議論と実証は必要にして十分と認められる。序章では **abjection** 概念の先行研究が調査され、これまでの文学領域を中心とした研究に対して、本論文は臨床心

理事例への適用を目的とすることが示される。第1章では **abjection** を主客成立以前にあつて主体生成の動きとして捉え直し、未分化な情動と分節化する言葉の間に、対象に向かえない情動のエネルギーを言葉に充てるナルシスティックな場を見出し、未分化な情動をおぞましさとして棄却する **abjection** が言葉を分節化する主体の生成であることを示している。第2章では、腐敗する死体や吐き出される内臓といったグロテスクな絵画を鑑賞する体験において、内外の区別や自他の区別、生死の境界を揺らされ同一性を揺すぶられるときに **abjection** が生じ、健常者においては言葉の機能によって主体の同一性を取り直すことが示されている。第3章では、境界例のロールシャッハ体験が詳細に分析され、内外の曖昧な刺激を形に収め得ないとき **abject** を体験しており、境界例においては行動による対処が生じることが示されている。第4章では、思春期危機事例の心理療法過程が分析され、対人関係で攻撃的な情動を体験し、対人関係から退却し引きこもったナルシスティックな場のなかで、描画を介して情動と言葉を辿り直す過程で **abjection** が生じ、言葉を用いる主体が生成されたとする。第5章の総合考察では、臨床心理事例に対して **abjection** という視点を持つことで主体の危機とそこからの回復という現象を十分に理解できると、結論している。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

臨床心理学分野における力動論では自己形成の理論が注目されており、**Kristeva, J.**がおぞましきの棄却 **abjection** を契機に、未分化な情動に言葉の欠如と言葉への欲望を認める構造として示したナルシズム論を、本論文が主体生成の視点で読み解いたことの現代的意義は大きい。また本論文は **Kriteva, J.**の考えを臨床心理実践に生かす端緒を明確に打ち出し、それを具体的な臨床心理事例から示し得ている点で独創的であり、心理療法論という研究領域に新たな地平を切り開くものである。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）の学位を授与するに値するものと判断した。